

ダンスの汎用的な力について —様々な競技からみたダンスの可能性—

鈴木純 (Jun Suzuki)
東北文教大学短期大学部

1. はじめに

ダンスは、思いやイメージを身体で表したり、音楽のリズムやメロディに合わせて踊ったりする身体活動である。一般的にダンサーは、体の各部位を意識的に動かしたり、体を連動させて動かしたり、リズムに合わせてたり・崩したり、多彩なステップを踏んだり、時にはダイナミックに、時には繊細に表現したりするなど、自分の体を思い通りに操作することに優れており、非常に高い身体性や運動能力を有しているといえる。そしてこれらの力は、様々な競技に共通する点も多く、他の競技にも貢献できる可能性を多く秘めていると考える。また、学校体育に目を向けると、平成29年学習指導要領の改訂において保健体育編の解説書では、「汎用性」「汎用的」という用語が頻出し、各運動領域において「どのように」行うのかという具体的な知識だけでなく、様々な学習場面や実生活・実社会に応用できるよう、「何のために」行うのかといった汎用的な知識を関連させて理解を促すことの重要性が示された。

以上の動機や背景から、本研究では、様々な競技に活かすことのできるダンスの汎用的な力について明らかにすることを目的として、ダンス以外の競技者を対象に調査を行い、本発表ではその途中経過を報告する。

2. 研究方法

<調査時期・対象>

令和3年2月集中講義、および令和3年前期、中学校・高等学校教員養成大学において教職専門科目である「体育・スポーツ実技(ダンス)」の授業を実施した。全15回授業終了後、受講生を対象に、質問紙調査を実施した(回答者18名)。

<調査内容>

(1) 回答者属性

(2) ダンスと自身の競技について

- ① ダンスで得た力は、自身の競技に活かすことができると思うか
- ② ダンスで得たどのような力が自身の競技のどのような点に活かすことができると思うか

<分析方法>

(1)は単純集計を行い、(2)の自由記述については、KJ法により分類してカテゴリ化し、考察する。

3. 授業内容

授業内容については、現行の学習指導要領に示されるダンス領域の主内容である、<創作ダンス><フォークダンス><現代的なリズムのダンス>を柱に構成し、各種目の特性が味わえるように全15回の授業を計画し、展開した。

4. 結果

(1) 回答者属性

① 男女比

回答者18名の内、男性9名(50%)、女性9名(50%)であった。

② 専門競技

回答者の専門競技は、野球2名、バスケットボール2名、ハンドボール2名、剣道2名、バレーボール2名、サッカー1名、ラグビー1名、テニス1名、陸上5名(ハードル・三段跳び・短距離・競歩・リレー)であった(現在競技を継続していない学生は過去の主な競技を回答している)。

(2) ダンスの可能性について

① 「ダンスで得た力は自身の競技に活かすことができると思うか」

回答結果は、「とても活かせると思う」16.7%、「活かせると思う」22.2%、「多少は活かせると思う」44.4%、「あまり活かせないと思う」16.7%、「活かせないと思う」0%、「全く活かせないと思う」0%であり、85%以上が肯定的な考えを示していた。このことから、ダンスで得た力は、多くの競技において、他競技にも活かすことのできる可能性があることがうかがえる。

② 「ダンスで得たどのような力が自身の競技のどのような点に活かすことができると思うか」

自由記述をKJ法で分類すると、7つのカテゴリに分類することができた。その結果、<リズム感・ステップ>についての記述が13件で最も多く、<コミュニケーション・協調性>が6件、<表現力>5件、<身体操作性>4件、<瞬発力>2件、<体力>2件、<その他>6件であった。特に記述が多かった<リズム感・ステップ>においては、一定のリズムで運動することを示す記述と、リズムに変化を付けて相手をかわしたり、対応したりすることを示す記述がみられた。具体的な記述内容や考察については、紙面の都合上、口頭発表時に示す。

【引用・参考文献】

・文部科学省(2018)学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房.